

コロナ禍における臨地実習の代替え学内演習を実践して ～ARCS 動機づけモデルに基づくアンケートの実施結果～

○河野 和美 社会福祉法人 枚方療育園 関西看護専門学校
キーワード：臨地実習の代替え 学内演習 ARCS 動機づけモデル 自信

I. はじめに

2020 年初旬より新型コロナウイルス感染症拡大予防対策により、看護学校も弾力的な運営を余儀なくされた。その影響により実習施設の受け入れが中止となった実習に代えて、シミュレーションによる学内演習を取り入れた。この学内演習の企画や実践を行うことにより、学生のアセスメントに至る思考過程の構築を行うためには学生自身が学習意欲を持って到達目標に向かい、やり抜く力が必要だと実感した。そこで学内演習を実践した後に学生の ARCS 動機づけモデルの反応を検討することで、学習意欲を向上させるために何が必要であったかを知り、今後の臨地実習の代替え学内演習にも反映させ、臨地実習へのスムーズな移行を図る手立てとしたい。

II. 研究目的

コロナ禍における臨地実習の代替え学内演習を実践した学生に対し ARCS 動機づけモデルに基づいたアンケートを行い、学習意欲を向上させるために何が必要であったかを明らかにする。

III. 研究方法

1. 対象：成人看護学実習における代替え学内演習を 12 日間実施した学生 69 名
2. 期間：2020 年 5 月～2021 年 3 月
3. 方法：3 年生：1 グループ 5～6 名で、1 事例の演習を行った。計 8 グループを教員 4 名で担当、事例は 2 種類用意した。2 年生：1 グループ 5～6 名で、1 事例の演習を行った。計 4 グループを教員 2 名で担当、事例は 2 種類用意した。

川上・向後 (2013) による ARCS 動機づけモデルに基づく CIS 日本語版尺度 (使用許可済) を用いたアンケート調査 (五件法) と自由記述欄を設けた無記名自記式質問紙調査、留め置き回収法とした。五件法の「まったくそう思う」「そう思う」

を肯定的な反応と捉え、逆転項目に関しては「全くそう思わない」「そう思わない」を肯定的反応として集計した。

- ・倫理的配慮：本研究は研究者の所属する施設の倫理審査委員会承認を受けたのち、対象者に文書での研究の趣旨と匿名性の確保及び回答の自由を説明した。回答内容による成績への影響などの不利益が生じないことを伝え、回収をもって合意形成とした。

IV. 結果

3 年生：回収率 78.3%、有効回答率 100%

2 年生：回収率 95.7%、有効回答率 100%

ARCS 動機づけモデルに基づく CIS 日本語版尺度を用いたアンケートの結果、肯定的な反応が高かった順は「S：満足感」は 90%、「R：関連性」は 85%、「A：注意」は 73%であった。「C：自信」は 47%と低く、下位分類「私はこの授業をうまくやる自信があった」の肯定的な反応は 26%であった。その内訳は 3 年生 31%、2 年生 18%であり、2 年生の方が低値となった (表 1 参照)。

V. 考察

J.M.ケラー (2010) は学びたいとの好奇心が高かったとしても自信不足、すなわち成功への期待感が不足しているために、適切に動機づけされていないかもしれないと述べている。アンケートの結果、臨地実習の代替え演習は「A：注意」、「R：関連性」、「S：満足感」の項目で高値であり、学習意欲向上の動機づけになっていたと考えられた。一方、「C：自信」に関しては、上手くやる自信はなかったがやってみると難易度は適切であったと実施以前の自信の無さが考えられる。

阿部 (2013) はエリクソン (2006) のエキスパートの条件をもとに、練習の量と質を支えるものは、「絶対にうまくなる」という意思と、「うまくなれる」という自信であり、自信がなければ苦しいと思える鍛錬を続けること

は難しいと述べている。学習を継続し目標を達成したいという意思や自信をもって課題に取り組むことが出来れば、継続性が生じ学習の質の変化、到達度の向上が見込まれる。学生が身につけた知識やスキルに対し自信を持たせるような指導や関わりが不足していたのではないかと考える。

また今回のような先行きの不透明な新型コロナウイルス感染症拡大の状況は未曾有であり、教員自身も初めての経験で準備期間が不十分な状況での代替え学内演習のスタートであった。同様に学生にとっても先の見えない不安な臨地実習の代替え学内演習であったであろう。前述の「C:自信」の下位分類「私はこの授業をうまくやる自信があった」の結果で3年生と2年生の肯定的反応に差がついた理由として、3年生はそれまでの実習経験があり少数ではあるが先の見通しができる学生がいる可能性がある。2年生は各論実習の初回時期であった為、実習経験が乏しく、自信のある学生が少なかったと考えられる。

今後は日々の講義や演習等で成功体験ができるようにする必要性を感じた。やればできそうだと、自分自身の努力によって成功できるはずだという意識が持てるような関わりを意識し実践したい。

VI. おわりに

学習意欲を向上させるためには「C:自信」

表1 ARCS動機づけモデルに基づくCIS日本語版尺度を用いたアンケート調査
コロナ禍における臨地実習の代替え学内演習の肯定的回答の割合

ARCSモデルの4因子と14の質問項目			肯定的回答の割合(%)		3年生 (%)	2年生 (%)
			ARCS因子	質問項目		
A 注意	1	先生は重要なポイントに向けて話を盛り上げていった	73	95	94	95
	2	先生は、この授業で私たちを熱中させるような方法を知っていた		79	78	82
	3	先生は、いろいろなおもしろい教え方を使っていた		76	75	77
	4	この授業には注意をひきつけられることはほとんどなかった(*1)		43	39	50
R 関 連 性	5	この授業で私は目標を立てて、それを達成しようとしていた	85	91	89	95
	6	自分の大きな目的を達成するには、この授業で良い成績をとることが重要だ		66	69	59
	7	この授業の内容は、私の期待や目的に沿っていた		79	75	86
	8	学生たちはこの授業に積極的に参加した		95	92	100
C 自 信	9	この授業の内容は、私にとってあまりにも難しかった(*1)	47	36	39	32
	10	この授業の難易度はやさしすぎも難しすぎもせず適切であった		79	75	86
	11	私はこの授業をうまくやる自信があった		26	31	18
S 満 足 感	12	私が思っていた課題の評価と比べ、先生の評価には満足している	90	90	92	86
	13	私の成績やその他の評価は、他の学生と同様に公平だったと思う		91	89	95
	14	この授業で私がしなければならない課題の量は適切であった		90	89	91

(*1)逆転項目

が不足していた。今後はどのように自信を得ることができるように関わることが課題であり、学生自身が学習意欲を持って到達目標に向かえるように支援していきたい。コロナ禍は現在も継続しており、実習施設の受け入れ状況や学生の実習参加状況が不安定な状況は続いている。今回の結果をふまえて日々の教育活動に活かすと共に、今後の臨地実習の代替え学内演習に反映させ臨地実習へのスムーズな移行を図りたい。

<引用文献>

- 1) 川上祐子、向後千春(2013) ARCS 動機づけモデルに基づく Course Interest Survey 日本語版尺度の検討、日本教育工学会研究報告集、p.289 - 294
- 2) J.M.ケラー、木克明監訳(2010) 学習意欲をデザインする - ARCS モデルによるインストラクショナルデザイン - 、北大路書房、p.48
- 3) 阿部幸恵(2013)臨床実践力を育てる！看護のためのシミュレーション教育、医学書院、p.78
- 4) Ericsson,A.K.,Charness,N.,Feltovich,P.,Hoffman,R.R.(2006).The Cambridge Handbook on expertise and expert Performance. Cambridge,UK : Cambridge University press.